

心の栄養剤NO116「百万回生きたねこ」

100万年も 知らない ねこが いました。100万回も しんで、 100万回も 生きたのです。
りっぱな とらねこでした。100万人の人が、 そのねこを かわいがり、 100万人の
人が、 そのねこが しんだとき なきました。ねこは、 1回も なきませんでした。

あるとき、 ねこは 王さまの ねこでした。ねこは、王さまなんか きらいでした。
王さまは せんそうが じょうずで、 いつも せんそうをしていました。そして、 ねこを りっぱな かごに いれて、
せんそうに つれていきました。ある日、 ねこは とんできた やに あたって、しんでしまいました。
王さまは、 たたかいの まっさいちゆうに、 ねこをだいて なきました。
王さまは、 せんそうを やめて、 おしろに、 帰ってきました。そして、 おしろの にわに ねこを うめました

あるとき、 ねこは 船のりの ねこでした。 ねこは、海なんか きらいでした。
船のりは、 せかいじゅうの 海と、 せかいじゅうのみなどに ねこを つれていきました。
ある日、 ねこは 船から おちてしまいました。
ねこは およげなかったのです。 船のりが いそいであみで すくいあげると、 ねこは びしょぬれになって、しんでいまし
た。船のりは、 ぬれた ぞうきんのようになった ねこをだいて、 大きな声で なきました。
そして、 遠いみなと町の こうえんの 木の下に、 ねこを うめました

あるとき、 ねこは サーカスの 手品つかいのねこでした。 ねこは、 サーカスなんか きらいでした。
手品つかいは、 毎日 ねこを はこの中に 入れて、 のこぎりで まっぶたつに しました。 それから
まるのままのねこを はこから とりだし、はくしゅかつさいを うけました。
ある日、 手品つかいは まちがえて、 ほんとうに ねこをまっぶたつに してしまいました。
手品つかいは、 まっぶたつに なってしまった ねこを両手に ぶらさげて、 大きな声で なきました。
だれも はくしゅかつさいを しませんでした。手品つかいは、 サーカス小屋の うらに ねこをうめました。

あるとき、 ねこは だろぼうの ねこでした。 ねこは、だろぼうなんか だいきらいでした。
だろぼうは、 ねこと いっしょに、 くらい町をねこのように しずかに 歩きまわりました。
だろぼうは、 いぬのいる 家にだけ だろぼうにはいりました。いぬが ねこに ほえている あいだに、だろぼうは 金庫を
こじあけました。ある日、 ねこは、 いぬに かみころされてしまいました。
だろぼうは、 ぬすんだ ダイヤモンドと いっしょにねこをだいて、 夜の町を 大きな声で なきながら、
歩きました。そして 家に帰って、 小さなにわに ねこをうめました。

あるとき、 ねこは、 ひとりぼっちの おばあさんのねこでした。 ねこは、 おばあさんなんか だいきらいでした。
おばあさんは、 毎日 ねこをだいて、 小さなまどから外を 見ていました。
ねこは、 一日じゅう おばあさんの ひざの上で、 ねむっていました。やがて、 ねこは 年をとって しにました。 よぼよぼ
のおばあさんは、 よぼよぼの しんだねこを だいて、一日じゅう なきました。
おばあさんは、 にわの 木の下に ねこを うめました

あるとき、 ねこは 小さな 女の子の ねこでした。ねこは、 子どもなんか だいきらいでした。
女の子は、 ねこを おんぶしたり、 しっかり だいてねたりしました。
ないたときは、 ねこの せなかでなみだを ふきました。
ある日、 ねこは、 女の子の せなかで、 おぶいひもが首に まきついて、 しんでしまいました。
ぐらぐらの頭に なってしまった ねこを だいて、女の子は 一日じゅう なきました。
そして、 ねこをにわの 木の下に うめました。ねこは しぬのなんか へいきだったのです。

あるとき、 ねこは だれの ねこでも ありませんでした。
のらねこだったのです。ねこは はじめて 自分の ねこに なりました。 ねこは自分が だいすきでした。
なにしろ、 りっぱな とらねこだったので、 りっぱなのらねこに なりました。

どんな めすねこも、 ねこの およめさんになりたがりました。大きなさかなを プレゼントする ねこも いました。
上等のねずみを さしだす ねこも いました。めずらしい またたびを おみやげにする ねこもいました。
りっぱな とらもようを なめてくれるねこも いました。ねこは いいました。
「おれは、 100万回も しんだんだぜ。 いまさらおつかしくて！」
ねこは、 だれよりも 自分が すきだったのです。

たった 1 ぴき、ねこに 見むきも しない、白いうつくしい ねこが いました。
ねこは、白いねこの そばに いって、「おれは、100万回も しんだんだぜ！」と いいました。
白いねこは、「そう。」と いったきりでした。ねこは、すこし はらをたてました。
なにしろ、自分がだいすきでしたからね。つぎの日も、つぎの日も ねこは、白いねこの ところへいって、いいました。
「きみは まだ 1回も 生きおわって いないんだろ。」白いねこは、「そう。」と いったきりでした。

ある日、ねこは、白いねこの 前で、くるくると 3回ちゅうがえりをして いいました。
「おれ、サーカスの ねこだったことも あるんだぜ。」白いねこは、「そう。」と いったきりでした。
「おれは、100万回も……。」と いいかけて、ねこは、「そばに いても いいかい。」
と、白いねこに たずねました。白いねこは、「ええ。」と いいました。
ねこは、白いねこの そばに、いつまでも いました。

白いねこは、かわいい 子ねこを たくさん うみました。ねこは、もう、「おれは、100万回も……。」
とは、けっして いいませんでした。ねこは、白いねこと たくさんの子ねこを、
自分よりも すきなくらいでした。

やがて、子ねこたちは 大きくなって、それぞれどこかへ いきました。「あいつらも りっぱな のらねこに なったな
あ。」と、ねこは まんぞくして いいました。「ええ。」と、白いねこは いいました。そして、グルグルと、
やさしく のどを ならしました。白いねこは、すこし おばあさんになっていました。
ねこは、いつそう やさしく、グルグルと のどをならしました。ねこは、白いねこと いっしょに、いつまでも 生きてい
たいと 思いました。

ある日、白いねこは、ねこの となりで、しずかにうごかなくなっていました。
ねこは、はじめて なきました。夜になって、朝になって、また 夜になって、朝になって、ねこは 100万回もなき
ました。朝になって、夜になって、ある日のお昼に、ねこはなきやみました。
ねこは、白いねこの となりで、しずかに うごかなくなりました。

ねこは もう、けっして 生きかえりませんでした。

どんな場所でも、どんな時代でも、どんなに飼い主さんに愛され
ても、自分自身が大好きでたまらなかつた猫が、白い猫と出会い
、たくさんの子供を授かり自分以上に大好きだと感じはじめる。

そして、愛する心を知って初めて悲しみを知る事になる。
でも悲しみ、辛い事を感じなければ、愛する喜びや幸せも分から
ない。

いろんな事を思い浮かべ～いろんな事を感じながら読みました。
皆様はいかがでしたか？

※ 「心」を真ん中にして「受」け止めると書いて
「愛」という字になります。

私もせっかく生を受けて、この世で過ごすから
には、たくさんの「心」を「受」け止めるよう
な人生を送り仕事をやりたいと思わせられました！

